令和８年度　研究推進計画

１　研究主題について

学校教育目標	高い志をもち　夢の実現に向けて 自分らしく　他者とともに社会を創る　児童の育成
研　究　主　題	**「考える文化」の構築を通した「真に自立した学び手」の育成** **～「問い・対話・振り返り」の連動による民主的な学びの実現～**
主題設定について	本校はこれまで、「TKF モデル」を基盤とした授業改善を推進し、児童の思考力・判断力・表現力の向上を図りながら、自立した学び手の育成を目指してきた。その成果として、児童の思考力・判断力・表現力は着実に高まり、教科や特別活動等における話合い活動にも好影響を与えている。一方で、依然として対話が「できる児童」を中心に展開され、自信のない児童が傍観者となる場面も見られるなど、学びの民主性という点において課題が残されている。とりわけ、「わからない」「まだ納得できない」といった思いが十分に共有されず、知的葛藤を学級全体で乗り越える学びには至っていない現状がある。 そこで令和８年度は、問いや教材の質の向上に加え、「わからない」を議題化できる民主的な学びの場の構築を重視する。全ての児童が知的葛藤を経験し、それを対話によって乗り越え、納得へと至る学びを保障することで、「真に自立した学び手」の育成を目指す。 「問い」「対話」「振り返り」の三つの柱を有機的に機能させ、次の視点で授業改善を推進していく。 ・全員参加型授業の基盤（「考える文化」）づくり ・バックワード設計による TKF モデルの洗練 ・探究型学習のデザインを行う 各教科で知的葛藤を乗り越え獲得した資質・能力と，生活科及び総合的な学習で活用・発揮した資質・能力を往還させ，学びを自覚化させることで，「真に自立した学び手」の育成を図る。 ※「真に自立した学び手」とは、学びを自分の課題として捉え、自ら問いを立て、対話を重ねながら考えを深め、次の学びへとつなげることができる学習者とする。
研究仮設	「めあて」と「振り返り」を逆算で設計し、「わからない」を可視化する対話の型やハンドサインを導入すれば、全児童が主体的に学びを調整し、深い理解（長期記憶）へと至る「自立した学び手」を育成できるであろう。
研究内容	授業改善を３つの事業に分けて行う。 ① 授業研究充実事業 ② 全員参加型授業の基本の「基」推進事業 ③ 探究型デザイン充実事業
研究方法	「２　研究内容の具体」で①～③の事業それぞれについて研究方法を示す。
検証の指標及び検証方法	「２　研究内容の具体」で①～③の事業それぞれについて検証の指標及び検証方法を示す。

２　研究内容の具体

①授業研究充実事業

ア．研究内容及び検証の視点

<研究内容>

①バックワード設計の導入と「めあて」の構造化

・単元のゴール（具体的な児童の振り返りの姿を最初に言語化し、そこから逆算して「めあて」と課題（T）を設定する。

・「めあて」を「解決すること」「解決の方法」「活動・テーマ」の三視点で構造化し、思考の焦点を明確にする。

②振り返りの質の向上と構造化

・「何を学んだか（内容）」に加えて「どのように学んだか（方法）」や「対話による考えの変容」を記述できる枠組みを導入する。

③教科の特性に応じた TKF モデルの洗練

・昨年度の課題であった「T や K での学習内容の確実な押さえ」を実現するため、教科ごとの「教材の特性シート」を改善・共有する。

→

＜検証の視点＞３つの「見える化」

【つながりの見える化】

めあてと振り返りが、逆算の設計によって学習過程が有機的に繋がっているか。

【思考の見える化】

児童が自分の思考の変容や納得の過程を、記述や対話を通じて自覚（可視化）できているか。

【プロセスの見える化】

構造化された学びにより、思考力・判断力・表現力が単元末テストの結果として表れているか

イ．検証の指標及び方法

指標(対象・方法)	検証の方法	目標値
児童・テスト結果	単元末テスト「思考力・判断力・表現力」の達成値達成率国語 80%以上，算数 70%以上，理科 80%以上，社会 80%以上の児童を 85%以上にする。前期後期の２回検証（後期単元末テストは，算数は，2 学期末たしかめよう，社会・理科は 3 学期制のテストを購入し 2 学期末のたしかめよう，国語は 2 月上旬までに後期単元末テストを行う）	国語 80%以上, 算数 70%以上, 理科 80%以上，社会 80%以上の児童を 85%以上
教職員・自己評価	「バックワード設計に基づき、めあてと振り返りを連動させた授業を実践した」割合を毎学期に検証	肯定的評価 85%以上
児童・単元の振り返り振り・ノートの記述分析	振り返りにおいて「自分の考えの変容」や「学び方（方法）」を記述できた児童の割合を毎学期に検証	B 基準達成児童 80%以上

ウ．研究内容の具体

本事業では、「バックワード設計」を核とし、教材研究から板書、振り返りまでを一貫したプロセスとして再構築する。

1. バックワード設計による「問い」と「答え」の連動

授業の設計手順を、従来の「導入から考える手法」から、「ゴールの姿から逆算する手法」へ転換する。

・「ねらい」の明確化：本時で付けるべき資質・能力を特定する。

・「理想の振り返り像」の言語化：授業の終末に児童が「何（内容）」を「どのように（方法）」記述できれば成功か、具体的な児童の姿を事前に言語化する。

・「めあて」の逆算設定：設定した振り返り像から逆算し、児童の学習意欲を喚起する主体的な言葉として「めあて」を考案する。語らせたいことに迫れる（T）を創り「思考の可視化」が、できようにする。そして、児童の思考プロセスが見えるような授業展開を構築する。

①「ねらい」を明確にする

「ねらい」が曖昧であると解決する内容や手立てが明確にならない

→

②「ねらい」を達成した「振り返り」に見られる，児童の姿の具体化を図る

児童が何を表出できればよいのか，具体的に言語化する

→

③「めあて」を言葉にする

Ｔの視点で，児童の学習意欲を喚起し，主体的な学びを促す言葉を考案する

授業では児童と一緒につくり，板書等で可視化する

2. 「めあて」の三視点化と共創

児童が「何を、どのように学ぶか」を見通せるよう、板書で提示する「めあて」を以下の３つの視点で構造化する。

視点	内容	文末例
解決すること	「ねらい」到達に結び付<解決すべき中心的な問い。	「なぜ，～か(だろう)」「どのように～か」など
解決の方法	調べる，(言葉，図，表等)話し合う・表現する・整理するなどの具体的なこと。	「～をして」「～を通して」「～を用いて」など
活動やテーマ	学習において解決すること・方法以外の行動的，形式的な目標となるもの。	「～しよう」など

これらを TKF モデルの「T（課題・追究）」に内在化させ、授業中に児童と共創しながら板書で可視化する。

3. 「教材の特性シート」の洗練と実践知の蓄積

昨年度の課題であった「T や K での学習内容の確実な押さえ」を実現するため、シートを改善する。

・教材の特性（ズレ）の分析：教材の論理（持ち味）と子どもの論理（既習フレーム）を摺り合わせ、児童が「もやもや」するポイントや知的葛藤を生み出す「ズレ」を特定する。

・焦点化発問（S）の準備：児童の多様な考えを繋ぎ、戻し、論点を焦点化するための教員の介入ポイントを事前に設計する。

・実践事例の集積：教科部会ごとにシートを蓄積・共有し、算数科の活用問題対策など学年を越えた連携を強化する。

4. 「振り返り（F)」の構造化による学びの自覚化

単なる感想に留まらず、自分の学びをメタ認知し、他学年や他教科でも活用できる資質・能力へと高める。

・二つの記述軸の導入：

視点	内容	提示する視点の例
何を学んだか	主に学習内容に関わること。学習を通して見いだす原理や法則，事象や現象についての具体的な知識や概念，「人，もの，こと」との関わり方など	「分かったこと」 「気付いたこと」 「できるようになったこと」 「まだ，分からないこと」など
どのように学んだか	主に学習方法に関わることで，解決の仕方、解決の手順、見方・考え方、対話の価値など	「どのように解決したか」 「どうしたらできたのか」など
その他	他教科等との関わり，次時への繋がり，友達との関わり	「～を調べる際，～を使えばいい」 「これから，～について知りたい」 「Ａさんの～」の話がなるほどと思った

・自己変容（T→T’）の記述：対話を経て「自分の考えがどう変わったか」「どこに納得したか」という納得の過程を言語化させる。

・「まとめ」との書き分け：クラス全体の「正解（内容)」である「まとめ」に対し、個人の「気づき（変容)」である「振り返り」を区別して記述させる。

※なお，各教科等の特質により，「まとめ」の位置付けや内容と「振り返り」との関係は異なるが，基本的には，まとめは，学習内容の要約・整理であり，学習上押さえるべきポイントを示す。振り返りは，児童自身による学びの気付きや変容等の確認・整理で，どのようなことを確認するのか視点やキーワードを示す。

5. 板書構成と学びの可視化

「問い（めあて)」から「解決（まとめ)」、そして「省察（振り返り)」へと至る学習過程の有機的な繋がりを板書で可視化する。

・「思考の見える化」：児童の思考の変容や納得のプロセスを板書に残し、自己との対話を促す。

・キーワードの提示：振り返りの質を担保するため、活用すべき用語や観点のヒントを板書に明示する。

②全員参加型授業の基本の「基」推進事業

ア．研究内容及び検証の視点

<研究内容>
・話合いのコツをもとにした対話の型に係る研修を行う。
・個人の授業の基本の「基」を充実させるとともに，学校全体で授業改善に取り組む。

→

＜検証の視点＞
・児童に話合いのコツの対話の型を提示し，児童が授業内で活用できたか。
・授業内でハンドサインやネームカードを活用して，授業に参加できたか。
・授業内で話し合いのコツの活用を促し，全員参加の可視化ができたか。

イ．検証の指標及び方法

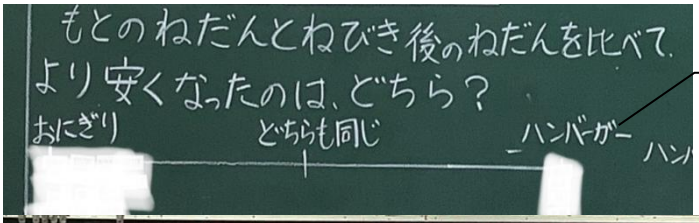
指標(対象・方法)	検証の方法	目標値
児童・アンケート	「授業内で，話合いのコツの対話の型を使うことができたか。」についての肯定的回答の割合を検証	肯定的評価 80%以上
児童・アンケート	「授業内で，ハンドサインやネームカードを活用して，授業に参加できたか」についての肯定的回答の割合を検証	肯定的評価 80%以上
教職員・アンケート	「授業内で，話し合いのコツの活用を促し，全員参加の意見の可視化ができたか」についての肯定的回答の割合を検証	肯定的評価 80%以上

ウ．研究内容の具体

①話合いのコツをもとにした対話の型に係る研修を行う。
・低・中・高学年に応じた系統性のある話合いのコツの型を作成（別紙　参照）
・各学年で学習する話合いのコツの項目について，目標に応じて具体的な会話の型を作成する。
　１年生　目標「相手の発言を受け止めたり，自分の考えに理由をつけて話したりする」
　あいづち　A「　　」B「なるほど」
　理由づけ「～だと思います。なぜなら…」
・毎月，目標を立て，振り返りを行う（イノベーションシート）
・各学年・クラスで重点を置く話し合いのコツの項目を決定し，クラスで振り返りをする。
・クラスの目標に応じた項目をイノベーションシートにて教師が振り返る。

②個人の授業の基本の「基」を充実させるとともに，学校全体で授業改善に取り組む。
・全員参加の可視化（ハンドサイン・ネームカード・マッピングなど）に関する実践交流を行う。
・教科・単元・内容などの具体的な活用場面を交流することで，即時活用ができるようにする。
・全員参加の可視化をする場面とその効果を蓄積する。
・わからないことから単元のゴールを設定し，各時間のめあてを決定する。
・「わからない」と意思表示をした児童を中心に授業を展開する。
・ハンドサインやネームカードを活用する際は，「わからない」「迷っている」という意思表示ができるようにする。

例）わからないことをマッピングにして可視化し，全員参加の授業を目指す。



全員の考えをネームカードで可視化する。

考えの変容を色の違う
ネームカードで可視化する。
初め：赤のネームカード
終わり：青のネームカード

問いに対する答えの自信の
具合をハンドサインで伝える
グー：わからない・考え途中
チョキ：考えはある
パー：自信あり（発表したい）

③探究型デザイン充実事業

ア．研究内容及び検証の視点

<研究内容>
① 探究型学習における問いの開発，
Q-A マップの活用・深化
② 教科の特性を踏まえた評価規準の作成

→

＜検証の視点＞
・生活科や総合的な学習の時間に，Q-A マップを活用したり，問いの開発をもとに Q-A マップの深化をしたりすることができたか。
・教科の特性を踏まえた評価規準を作成し，適切に評価をすることができたか。

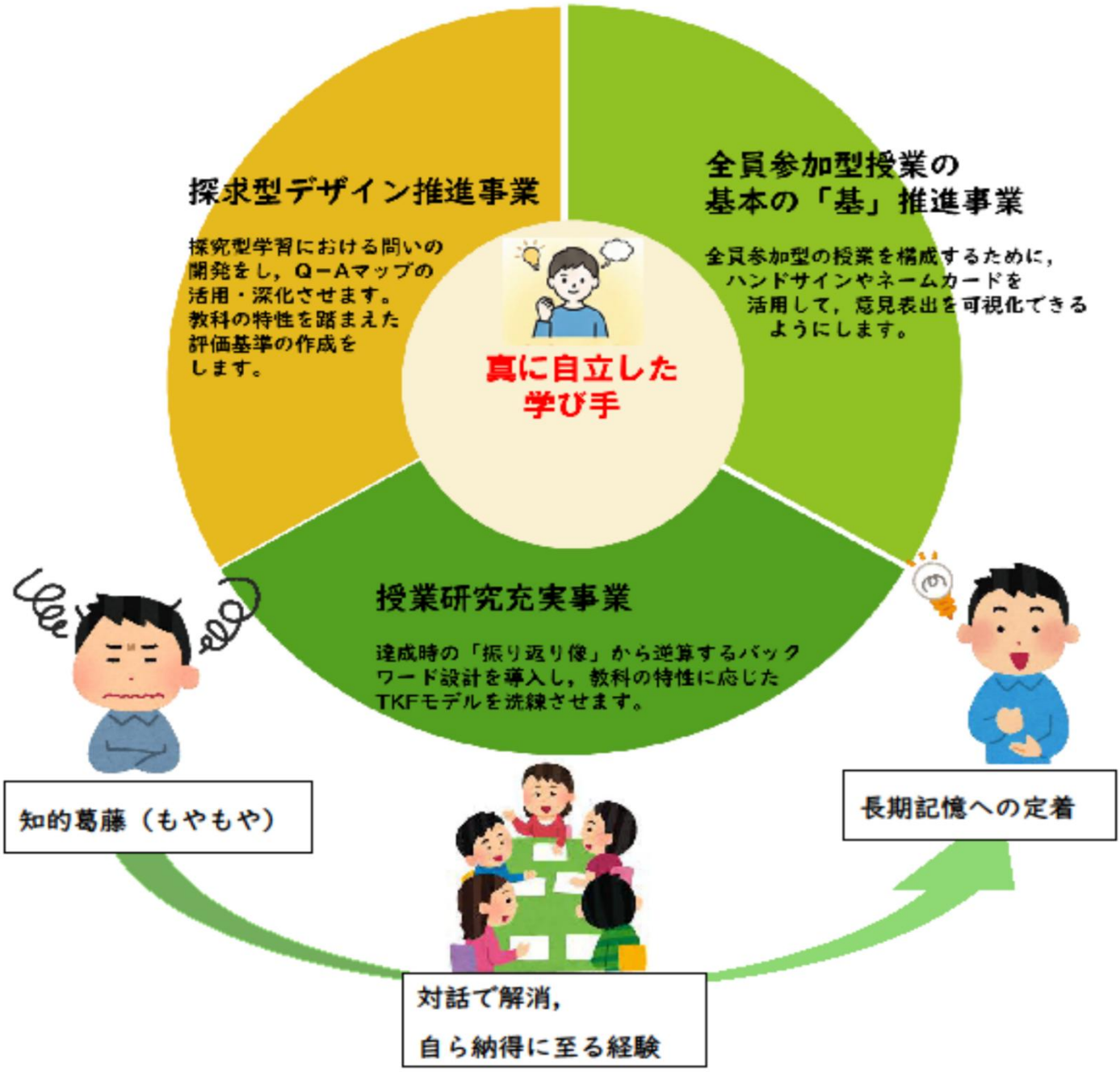
イ．検証の指標及び方法

指標(対象・方法)	検証の方法	目標値
児童アンケート	「生活科や総合的な学習の時間に，課題を解決するために方法を考えたり自分から取り組んだりしている。」について，肯定的回答の割合を学期末に検証	肯定的回答が８０％以上
教職員アンケート	「生活科や総合的な学習の時間に，Q-A マップを活用したり，問いの開発をもとに Q-A マップの深化をしたりした。」について，肯定的回答の割合を学期末に検証	肯定的回答が８０％以上
教職員アンケート	「教科の特性を踏まえた評価規準を作成し，適切に評価をした。」について，肯定的回答の割合を学期末に検証	肯定的回答が８０％以上

ウ．研究内容の具体

① 探究型学習における問いの開発，Q-A マップの活用・深化
・年度初めに，探究型学習や問いの開発について研修を行う。
・定期的に，Q-A マップの見直しや深化を行う時間をとる。
② 教科の特性を踏まえた評価規準の作成
・年度初めに，評価規準の作成について研修を行う。
・生活科や総合的な学習の時間の特性を踏まえた評価規準の作成について考える研修を行う。

検証の指標ダッシュボード研究構想図



単元末テスト結果	教職員の自己評価	単元の振り返り
「思考力・判断力・表現力」の達成率	「バックワード設計に基づき，めあてと振り返りを連動させた」割合	「自分の考えの変容」や「学び方」を記述できた児童の割合
85%以上	85%以上	80%以上